

ジョイサポコラム No.10

思い返せば

フロムワン付属診療所 佐藤眞紀子



昭和が終わる数年前に、大学を卒業しました。

大学は、医学部より先に、衛生学部、短大、さらに専門学校がすでに設置され、看護師、

検査技師、放射線技師など医療に関わる多職種が養成される学園でした。どの学校、どの学部の学生も、同じ学園で学ぶ仲間であり、同じ制服で通学する、多職種連携を先取りする学校でした。チーム医療重視の礎を作ってもらったと思います。ただ、制服だけではどうしてもイヤで、入学式に着たくらいで、私服のブレザーで通しました。女子はちょっと大目に見てもらえたのだと思います。

卒業して、リウマチ膠原病内科に入局しました。学園を卒業した新人ナース3人と一緒に、病棟研修をスタートしました。患者さんも若い女性が多く、患者さんに励まされながら、女同士助け合い、愚痴を言い合ったことは懐かしい思い出です。

大学院を修了後、大学病院のリウマチ膠原病外来を担当しながら、眼科でも勉強させてもらいました。眼科開業医の、叔母の手伝いをするつもりでした。

眼科では、女性医局員は大学病院の手術室には入れてもらえない、という時代でした。白内障手術で有名な教授がおられ、超忙しい眼科で、ゆっくり患者さんに向き合う暇はなく、内科との違いに戸惑いました。研修は、

中途半端になったと反省していますが、今も眼科のことなど相談に乗ってくれる、暖かい仲間に出会うことができました。

週1回担当していたリウマチ膠原病外来は、臓器別の内科では診断のつかない患者さんや原因不明の発熱など、現在なら、総合内科で診るような患者さんも診る機会が多く、内科臨床の面白さを経験し、内科を続ける選択をしました。

その後、ある講演会をきっかけに、広島ของ病院で終末期緩和医療を勉強することになりました。ナース達は、ホスピスの国際シンポジウムにも毎年参加するなど、積極的に緩和医療に取り組んでいました。

終末期緩和医療では、内科の知識だけでは足りないことに気がつき、母校の麻酔科に通い、標榜医をとりました。麻酔科の知識は、在宅医療において、とても役に立っています。

思い返してみますと、願ったことを軽やかに実行できたのは、私が女性であったからと思っています。内科、眼科、麻酔科、終末期緩和医療と、医学のたくさんの分野を、自由に行き来して、学ばせて頂きました。書き連ねてみますと、幸せな人生を歩んでいるなと思います。ずっとチャレンジし続けてこれたことに感謝です。

そして今、広島からずっと一緒の、4人のナースと、フラットに意見を出し合い、楽しく、私達らしい毎日を過ごさせて頂いていることに、心から感謝です。

これからも、5人で力を合わせて前進したいと思います。